サー・フィリップ・シドニー作
『アーケイディア』牧歌集（抄）
和訳・注解・解説

村　里　好　俊

40　ギネキアの歌[1]

いざ聞け　悲嘆に暮れた亡霊たちよ　黄泉の復讐の女神たちよ
憎悪に満ちた天がもたらした　我が悲哀
天が謀りしは　我が輝かんばかりの命の炎よ
それを惨めな灰燼に起さんとす　鏡が映すは我が崩壊

ああ　かように力強き天使を用い
その憤りの矢を　かように卑小なる的にむけ放つを見よ
いざ洞窟よ　我が墓穴となるがいい
来れ死神よ　汝の漆黒の懐中に我を受け入れよ

いったい日々死にゆく精神にとって　生命とは何であろうか
そこで人生に一息ついても　吸いこむのは悲哀の空気とは
そこではあまりに愛する人を目にし　身体の感覚が麻痺するのみか
最も高尚な思いが　真っ逆さまに落とされてしまうとは
　　その時知る　自らの外面が　自らの状況がどうであるのか
　　肉に包まれた死神　生きながら墓に埋葬されるがごときか

1　シドニーは様々な韻律や脚韻構造の実験をしている。中には脚韻が一種類だけで作られた詩（ギネキア妃が女装したピュロクレスへの恋心を歌う詩）もあるが、本詩は、ａｂａｂ、ｂａｂａ、ｃｄｃｄｃｃの脚韻構造で歌われており、訳詩もそれに合わせた。

60　フィロクレア姫の恋の苦しみの歌[2]

徳、美、言葉は、打ち、傷つけ、魅了した
驚異、愛、歓びで、私の心、眼、耳を。
前者、中間、後者は、縛り、強要し、固めた
知性、優雅、誓約の力で、その作用、容姿、求愛を。

名誉、好み、信頼は、しっかり、強く、深く
捕まえ、貫き、占有した、私の判断、感覚、意志を。
やがて悪事、軽蔑、欺瞞が、育て、盗み、上を這う
縛り紐、好意、誠実を、壊し、汚し、殺すため。

その時、悲嘆、不実、証拠が、受け取り、燃やし、教えた
地に付いた、気高い、然るべき、遺恨、激怒、侮蔑を。
ああ、悲しい。（虚しく）私の精神、視線、想いは
彼、彼の顔、彼の言葉を、離れ、退け、慎む。
　物、時、所は、解き、消し、楽に出来ぬ
　私自らの、抱かれた、求められた、絆、火、病を。

70　アゲラストスの哀悼歌[3]

　嘆きは訳ありの悲しみの蕾ゆえ　〈嘆き〉
悲しみは悪運の従者ゆえ　〈運命〉
悪運は民の被害に追いつかぬゆえ　〈被害〉
今や大公の喪失が我らの被害を公（おおやけ）にしたゆえ　〈公〉
我らは悲しみを自然の摂理に支払い　〈自然〉

2　本詩は、各行ごとに、「徳が打ち」、「美が傷つけ」、「言葉が魅了した」というように、「一」、「二」、「三」、「一」、「二」、「三」と対応する構成となっている。

3　クレオフィラに女装したピュロクレス王子の姦計に嵌められて、パシリオス大公とギネキア妃は恋慕する彼（彼女）の待つ深夜の真っ暗な洞窟へと赴き、一夜を明かすが、朝の曙光の中で、大公は昨夜一緒に過ごした女性が実は妻のギネキアであったと悟り、渇いた喉を潤すため妻が持参した「愛の媚薬＝精力薬」を飲み干す。そして、あたかも死んだように崩れ落ちる。アルカディアの羊飼たちは大公の遺体を発見し、彼らの支配者の喪失を嘆き、仲間の一人アゲラストスに彼らにために哀悼歌を作詩するように頼む。その求めに応じて彼はこのセスティナ sestina を歌う。セスティナとは、六行六連体の詩形で、六行連六個と三行の追連から成るプロバンス詩型のこと。

内なる悲嘆を外なる嘆きで封印する。　〈嘆き〉[4]

　我らの声を絶えざる嘆きからどうして慎むのか
我らの心を悲しみの座とする正当な理由があるのに。
自然がその力を運命の鋭い針に
貸し与えると見える場合には
ああ、好んで我らが大衆劇場を選択し
自然と運命の残酷な仕打ちを記念する品々を陳列しよう。

　かような力が共謀し我らに打撃を与えるので
（その力は計れるが、嘆きのみではどうにもならぬ）
眼に見える記念碑を残そう
自ずと流れる涙、乱れる頭髪、悲しみの嗚咽の。
亡くしたのだ、残忍な運命の一撃で
アルカディアの宝石、自然の世にも高貴な緑児みどりごを。

　おお、老いて耄碌した自然、おお、盲いた自然よ
お前は自らを引き裂き、自らに被害を与えんとするか
そのような権限を汚らしい運命に授け
お前の所産を喪失しそれでこの世を嘆きで満たすとは。
お前の残忍な継母の眼を我らの悲しみに、周知の
我らの喪失に向けよ、そうしてお前の恥が周知と分かるのだ。

　ああ、持っていれば、我らの悲痛を更に周知とするため
眼には大海原を、自然に恵まれた青銅の舌を
わめく声を、悲しみで出来た心を
炎で出来た息、被害しか知らぬ知性を。
楽しみ事は我らを幻滅させ、音楽は嘆きを歌い
学問は運命の転落の主題に傾注するから。

　いや、我らの悲惨はこの卑しい運命に晒され
秘めた心痛は地獄の嘆きを伴う猛烈な悲嘆を
吐き出して周知のものとする事が出来なくて

4　ク日本語訳ではうまく出せないが、第一連の各行の終わりの言葉が異なる順序で第二連以下の各行の終わりの言葉として現れる。

永遠の被害感を内に秘め
脆い自然の重荷を背負い、悲しみを育て
魂を悲しみで養わざるを得ないのだ。

　悲しみが我らの運命の幕引きをするので
我らは死してこの被害を周知とする。
常に嘆きつつ生きる者の自然は死ぬことへの恐れなり。[5]

71　ストレフォンとクライオスの歌[6]

［ストレフォン］　汝ら山羊飼の神々よ、そが愛するは草茂る山々　〈山々〉
　汝らニンフよ、そが住まうは泉、心地よき谷間の　〈谷間〉
　汝ら半獣神よ、喜びは自由で静かなる森　〈森〉
　どうか静かに聞きたまえ、嘆きの調べを　〈調べ〉
　その調べ、わが悲嘆に届くのは、明けやらぬ朝　〈朝〉
　悲哀を引きずって、やがて疲れて至る夕暮　〈夕暮〉

［クライオス[7]］　ああマーキュリー　先触れなるかな　夕暮れの

5　シドニーの詩型は、ペトラルカ『カンツォニエーレ』一四二番、二一四番、二三七番、二三九番のそれと同じ。シドニーはこの詩型を利用した最初のイギリス詩人であっただけでなく、更に進んで、次の「ストレフォンとクライオスの歌」のごとく、二重のセスティナ double sestina、及び、最後の「アゲラストスの牧歌エレジー」のような、脚韻を踏ませるセスティナ rhyming sestina をも作詩している。スペンサーは、恐らくシドニーに鼓舞されて、やや異なる型ではあるが、『羊飼の暦歌』の「八月の牧歌」の最後の方でセスティナを利用している。同じ六つの言葉が単調に七回反復されるのは、哀悼歌にふさわしい詩型と評することができよう。当時の宮廷人で文人のジョージ・パットナムは、『英詩の技法』の中で、「哀悼歌を聴いて肌身に沁みるものにできるかどうかが、作り手の技量を試す鍵となる」と述べている。

6　本詩は、『オールド・アーケイディア』第四牧歌で歌われ、アルカディアの羊飼たちは（仮）死したバシリオス大公を悼み、他の羊飼たちはこの機会を利用して「彼ら自身の個人的な悲しみを記録しようとする」。一方、ストレフォンとクライオスがずっと成長した人物として描かれる『ニュー・アーケイディア』では、この詩を歌うのは二人の友人のラモンであり、第一牧歌の一部をなす。

7　二人の羊飼、ストレフォンとクライオスは共に、女羊飼ユレイニアを愛する恋仇であるが、二人の間にむき出しの競争心がないのは、ユレイニアの不可思議な魅力による。彼女は「神の愛」と同等の存在なのかもしれない。本詩と次の詩は、アルカディアからユレイニアが出立したことを嘆く歌だが、彼女の旅立ちは『ニュー・アーケイディア』では冒頭部分で描かれる。サンナザーロの牧歌四番のセスティナ形式は、二人の羊飼たちの絶望的な対話形式という点で本詩に類似する。この詩の詳しい分析は、ウィリアム・エンプソン、岩崎宗治訳、『曖昧の七つの型』上（岩波文庫）一〇六～一二〇頁等を参照。

ああ天駆けるダイアナ　狩場は人気なき山々
ああ麗しき明星　賜りし名は「朝」の
わが声が満ちている間は　悲哀の谷間に
どうか静かに聞きたまえ　嘆きの調べを
しばしばエコーも聞き疲れた　神秘の森で
［ストレフォン］　ぼくはかつて自由な民　これらの森で
昼は陽を避け日陰で憩い　狩りをするのは夕暮れ
ぼくはかつて評判だった　奏でる心地よい調べで
ところが今は追放されて　四方を囲むは恐ろしい山々
そそり立つ巨大な絶望　醜い苦悶の谷間
ぼくは苦痛に叫ぶ梟となる　決まって朝には

［クライオス］　ぼくはかつて歓喜を得た　決まって朝には
狩るのは野の獣　狩場は森
ぼくはかつて音楽だった　これらの谷間の
ところが今は闇に覆われ　ぼくの昼は夕暮れに
心は張り裂け　土竜塚すらまるで聳える山々
谷に満ちるはただ叫び声　かき消えし調べ

［ストレフォン］　いつからか　ああ瀕死の白鳥が歌うがごときぼくの調べ
その声自体が　告げる朝
悲嘆の力で駆け登る　聳える山々
いつからか　わが想い荒れ野となりぬ　かつての森も
いつからか　悟りぬ　わが喜びは沈む夕暮れと
身は落ちぶれて　到るは踏みしだかれし谷間

［クライオス］　いつからか　幸せに暮らすこれらの谷間の
民が願う　止めるようにと　ぼくの奇妙で悲痛な調べを
悩まし乱すからと　昼の仕事を　歓びの夕暮れを
いつからか　ぼくは夜を憎み　さらに激しく憎む朝
いつからか　わが想い野獣のごとくわれを追う　森で
そして自ら願う　この下に仰臥したい山々の

［ストレフォン］　見えるがごとし　高く壮麗なる山々が
姿を変えるその有り様　低く沈んだ谷間へと
聞こえるがごとし　奇怪に変じたこれらの森で

夜鳴鶯が　梟に習うその調べ
感じるがごとし　歓びの朝が
転じてしまう　詩の静寂に　夕暮れの

［クライオス］　見えるがごとし　みだりに曇る夕暮れが
日の出と共に現れる　山々に
感じるがごとし　不快な臭いが漂う朝を
花の香りを嗅ぐときに　これらの谷間で
聞こえるがごとし　（耳に届く甘き調べも）
惨殺される者の恐ろしき悲鳴が　森で

［ストレフォン］　木を焼き尽くしたい　すべての森の
太陽には最後の別れ　さらば夕暮れ
楽を奏する者どもを呪い　締め出さん調べを
悪意を込めて憎むは　高き尊大なる山々
侮蔑で侮辱するは　卑屈な山々
こうして忌み嫌う　夜を夕暮れを　昼を夜を

［クライオス］　わが身を呪う祈りは　朝に
ぼくの炎は凄まじく　なお激しい　燃える森より
ぼくの身は落ちぶれて　なお低い　一番低い谷間より
ぼくの願いは日暮れを見ぬこと　夕暮れに
恥じ入って　わが身を憎み　見上げる山々
耳すら塞ぐ　狂わぬように　流れる調べで

［ストレフォン］　だって　あの娘のすべてが奏でる　完璧な調べ
美の品々の輝きは　遥かに凌ぐ　頬染める朝を
壮麗さでも遥かに凌ぐ　聳える山々を
真っすぐな本性は　糸杉を凌ぐ　茂れる森の
あの娘がぼくを投げ込んだ　久遠の夕暮れに
陽のごとく輝く瞳が奪われた　暗き谷間

［クライオス］　だってあの娘と比べたら　アルプスも谷間
一言ですら　えも言えぬ天球の調べ
近づけば　陽が昇るごとし　夕暮れに
その向かうところ　朝から萌え出る朝

なのに去りぬ　去られて残るは萎れし森
荒れ地と化すは　かつて最上の草生い茂る豊かな山々

［ストレフォン］　山々よ証しせよ　証しせよ谷間

［クライオス］　森もまた　悲嘆に沈め　われらが調べに
これぞ朝への賛美歌にして　捧げる歌なり　夕暮れに

72　ストレフォンとクライオスの十行連歌連環[8]

［ストレフォン］　悲嘆を歓び、歓びを忌み嫌い
喜悦を嫌悪し、慰安の想いに疲れ果て
心をあらゆる形の苦悩へ向けては
苦悩の形をクルクル回し気まぐれを喜ばす。
私に一番の不快を与えるのは何かを熟考し
その不快の力を蔑視しては
魂に最大の苦痛を与えるものをしっかり抱き締める。
光線に眩んだ我が眼は凶暴な暗闇。
破滅の中に住み、吸い付く痛みを糧として
我が苦悶からではなく、我と我が身から離れようと想う。

［クライオス］　我が苦悶からではなく、我と我が身から離れようと想い
人生と呼ばれる今の時を忌避し、いや、自然が
人生をくれたのは苦しみを与えるためと考える。
私の辛い境遇も死神の尖ったナイフを鈍らせず
死神の作用が行き渡っている私を容赦してくれない。
こう考えると、自然、人生、死神が悲しみの勝利碑を

8　「連環 crown, corona=wreath or garland　花輪、花冠」は、第一連の最後の行が第二連の第一行となり、第二連の最後の行が第三連の第一行となり、同趣旨の型が続き、最後の第十連の最後の行が第一連の第一行に戻るので、歌全体が円環を描いて「王冠」の形を作る歌である。これは英語で書かれた最初の連環歌であるが、シドニーの実弟ロバート作「ソネット一一～一四番」、実妹メアリの文学サークルのメンバーであったサミュエル・ダニエル作『ディーリア』三一～三五番、及び、姪のメアリ・ロウス作『パンフィリアからアンフィランサスへ』P77-P90 の一四篇のソネットの連環等にその影響が見られる。『ニュー・アーケイディア』では、本詩は第二牧歌でラモンによって朗誦される。前歌と同じく、自家撞着的逆説と誇張法が一貫して利用されるが、「二重セスティナ」が持つ形式的修辞的緊張には欠ける。

征服された我が心に建てていると思えるのだ。
私はそれに屈服し、求める息吹は
悪疫はびこる墓の異臭に外ならない。
私が切望するものは、運命の悲惨さのみ。

［ストレフォン］　私が切望するものは、運命の悲惨さのみ。
私が今ある凡てを孕むものを
養おうとする。自らを救うつもりなら
私の中で最高権力の座にあるものを救わねばならぬ
それは悲しみの苦痛を織り成す憎らしい織物。
悲しみよ、ならば私を大事に扱え、私は悲しみなのだから。
悲しみの他いかなる物も今の私は持てない。
だからお前の持ち物として私を飾れ。お前の助力を
借りたいのは、お前が私の富であり、肥沃な精神を
不毛にするに十分な膂力を持っているからだ。

［クライオス］　肥沃な精神を不毛にするに十分な膂力
それは私に力の限り吹き付ける巨大な嵐。
涙は雹の粒となり、嘆息は恐ろしい突風となり
叫び声は雷となる。雷光は私の荒れた顔
真っ暗な天は何も見えない私の魂。
木々を根絶やしにする宙に漂う精霊は
私の希望を完膚なきまでに破壊する絶望。
違いがあるとすれば、人々はみなその嵐に耐えるが
私には出来ないこと。その時私は己から逃亡し
私の破滅が直ぐ間近に迫る来るのだ。

［ストレフォン］　私の破滅が直ぐ間近に迫り来る。
原因、結果、原初、終末、その凡てが
私の中にある。ならばどんな救いを試みれようか。
我が船、私そのものは、進路を愛の方向へとるが
嵐に打ち砕かれて、慰撫の帆柱が折れている。
理性の太索ふとづなは希望の錨いかりを断ち切られ
恋心の索具は裂かれて風に舞う。
壊滅の風は船を目指す目的地からどんどん遠ざけ
憂慮の波に弄ばれ、絶望の岩礁にて

　　砕かれる、それが至福の埋葬所。

［クライオス］　至福の埋葬所、絶望の岩礁で
　　深い欲望の鋤を手に長く耕す。
　　確固たる目的の種は真実を見逃さぬこと。
　　私はその種を様々な想念で把耕し、想念は
　　一致団結し好意を唯一大事な報酬にしようと諮る。
　　だが、悲しいことに、歳月が巡り来て
　　収穫の季節になるが、私が刈るのは
　　たっぷり太った憎しみと咲き出でし不在のみ。
　　視力は陰りを見せようと、私にはよく見える
　　絶望の中で刻苦する人々の苦痛は虚しいと。

［ストレフォン］　絶望の中で刻苦する人々の苦痛は虚しい。
　　私も同じ、意志の釣竿で
　　麗しいシビレエイ[9]を捕らえようと求めたとき。
　　そのとき既に絶望が希望を抹殺した。
　　それでも恋心は是非ともその技を発揮しようとし
　　この事態を得た。釣り手が今や捕まって
　　己の重荷に耐えていた釣竿も腰折れて
　　死の方へ、悲哀の池に溺れて、その時美しい
　　容色を偽装した死の側に連れて来られた。
　　こうして、嗚呼、私は追いかけて喪失を手に入れた。

［クライオス］こうして、嗚呼、私は追いかけて喪失を手に入れた
　　初めて鶏冠のあるバシリスク[10]を知った時。
　　バシリスクの足跡をキスをしながら度々辿り
　　必ず悔やむことになる不幸な出来事で
　　我が眼は怪しい光を放つ彼女の眼にぶつかり
　　その視線に呆然自失の我が眼を彼女の光は襲った。
　　それ以来、我が心は本来の居場所を失い

9　捕えられると電気を発して釣り人の手を痺れさせる魚。『二ュー・アーケイディア』では、フィロクレア姫に恋するアムフィアロス王子の楯の紋章の図柄がシビレエイだが、これは彼の恋の追跡の対象が一旦捕えられると彼の破滅を引き起こすことになる事実を表象すると思われる。

10　アフリカの砂漠に住み、その息や眼光で人を殺したと言われる伝説上の動物。蛇、蜥蜴、龍などの姿を持つと言う。このバシリスクに愛する女性を擬えている。

彼女の馨しい毒の力に侵され
私を死んだも同然とし、彼女の許へ立ち去った。
だがああ、心の逃亡は私の遺骸を生きたまま葬った。

［ストレフォン］　だがああ、心の逃亡は私の遺骸を生きたまま葬った
私としては死んでいるが、彼女の中で生きている
私からの逃亡は。彼女の光線は我が眼が彼女を
見られるよう、生命の火花を散らしていた。
だが今や、生きた光が不在となり
完全に死ぬ前に、私は土へと還る
永遠の苦痛が我が魂を捉え
この肉体の中にいつまでも奴隷として閉じ込めない限り。
こうして私は、死の国に住みながら
現世の足枷を嵌めて永久の地獄を感じるのだ。

［クライオス］　現世の足枷を嵌めて永久の地獄を、ああ本当に
私は感じる。それからの解放を見出すためなら
大地を売ろう、諸天を売ろう。
だが虚しい考えだ、生が死であり、死が平安を
生み出さない所で、それらの苦痛が消えるとは。
おお、麗しい、唯一絶対に麗しい御方、貴女様から
これらの悍おぞましい、見るも悍ましい厄災が私を襲ったとは。
それもひとえに太陽に等しい貴女様が私から過ぎ去ったから。
それゆえに、凡ての祝福を下らぬものと思い定め
悲嘆を歓び、歓びを忌み嫌うのだ。

［ストレフォン］　悲嘆を歓び、歓びを忌み嫌う。
だが、もう終わりだ、クライオス、やめにしよう
我らの憎しみ溢れる楽の音は薬草さえ枯らし
憎しみに燃える息吹のせいで木々は傾くから。

75　アゲラストスの牧歌エレジー[11]

素朴な羊飼の笛の音を最高に愛でた
　あの高き羊飼が身罷った今
　馨しき詩神方、悲しみの調べを降り注いで欲しい。

そして、おまえ、おお、木々よ（木々に命があるなら）
　多孔の樹皮を通して受け入れるのだ
　これら謂れのある悲痛の奇妙な響きを。
苦悶の言葉に分類されたわが嘆息
　わが嘆息でおまえの枝々を切り裂かせよ
　悲しみの印を後に残せるように。
而して木々の中に、悲惨をかたどるに
　似つかわしい木が育つなら
　おまえの悲嘆を表す伝令役を申し付けよ。
涙するミルラ[12]は、この嘆きの最も正しい理由に
　必ずや助け舟を出してくれよう。
　馨しき詩神方、悲しみの調べをいま降り注ぎたまえ。

おまえ、哀れな大地、自然の定めの名の下に
　運命に汚され、おまえの宝玉、われらが現世の聖者を
　失うような危難を忍ぶ大地よ
おまえの顔に漆黒の烏を群がらせよ。

11　本詩は、スペンサー作『羊飼の暦歌』の「一一月の牧歌」で歌われるダイドーへの哀悼歌と共に、英語で書かれた最初の正式な牧歌エレジーの例である。牧歌エレジーの伝統は、紀元前三世紀のテオクリトスの「ダフニスへの悲歌」からビオンの「アドゥニスへの悲歌」とその弟子モスコスの「ビオンへの悲歌」を経て、ローマのウェルギリウス『牧歌』第五歌で新しい展開を示した。やがて一四世紀にペトラルカやボッカチオによって復活した牧歌エレジーを、ルネサンス期のヨーロッパ諸国の詩人たちがこぞって書いた。シドニーの牧歌エレジーの直接の材源となったのは、モスコスのエレジーに範をとったサンナザーロの『アルカディア』第一一牧歌であろう。サンナザーロに倣ってシドニーは三韻句法（ダンテが『神曲』で用いた詩形で、英詩では通常弱強五歩格でａｂａ、ｂｃｂ、ｃｄｃの脚韻）と反復句の繰り返しを利用し、自分に代わって嘆くように木々、大地、花々に要請し、エコーやピロメーラに哀訴し、人は死ぬが、他の成育するものたちは衣装を新たにすることを嘆いている。本詩の後半でシドニーはサンナザーロから離れ、不滅の魂が天国で蘇るというキリスト教的な慰安を味わえない異教の支配者のために異教の羊飼が弔う哀悼歌を書いている。

12　アフリカ東部・アラビア産の没薬を採取する樹木で、その幹から樹液が滲み出る様が泣いているように見える。

　海の水凡てがおまえの涙と見積もらせよ。
　おまえのはらわたを殺戮の武器で固めよ。
いまおまえの中で金は錆び、ダイヤモンドは朽ちるがまま。
　真珠はその母が耐える苦悩で青ざめる。
　おまえ自体、この先、その光を見ることはない。
おまえ、おお、花花、これらの異様な変化を
　たまたまなめるまで、かつて君主であった花花よ
　君主の崩御の徴として、自らを真っすぐ差し上げるのだ。
百合は漆黒の喪の色に染めて
　ヒヤシンス[13]の上には、永遠の嘆きの声を置くのだ。
　馨しき詩神方、いまは悲しみの調べを降り注ぎたまえ。

おお、エコーよ、これらの森を轟きで満たし
　最後の音節のみならず、あらゆる音節に注目せよ
　あらゆる音節がわが嘆きの心に届くとは限らぬゆえに。
一のエコーが他のエコーにわが悲嘆の音声を
　投げかけ、あらゆる森と湖を通り抜けるまで
　決して終わらせてはならぬ。
いや、諸天にまでおまえの正当な嘆声を送り
　星星の覚束無い常の歩みを止めるのだ
　われらが悲哀に耳を傾けさせて。
星星への特別な計らいの訳を訊ねよ
　なぜに命のない星星がそんなに長生きし
　徳高い人々がそんなに早く居場所をなくすのかを。
偉大な人々の中で善き人々がそれほど群れ集い
　肘を動かすほどの隙間もなくて死なねばならぬのか訊ねよ。
　善き人々が乏しいのならば、これは不正なのかどうか訊ねよ。
知恵はこのわれらの惨めな時代が一つの真実の箱の中の
　徳の凡ての宝物を盗むのを目撃したのか。
　馨しき詩神方、いまは悲しみの調べを降り注ぎたまえ。

13　スパルタ王アミュクラスとディオメデの息子。眼の醒めるような美少年で太陽神アポロンに愛された。二人はスポーツを楽しんだが、ある時、アポロンは過って円盤をヒヤシンスの額にぶつけてしまい、深手を負ったヒヤシンスはその場で息絶えた。為す術のないアポロンは、ヒヤシンスとの思い出に、大地を濡らすヒヤシンスの赤い血からヒヤシンスの赤い花を咲かせた。その花弁には、ギリシア語の大文字で「ＡＩ　ああ、悲しや」と綴られていたという。

だれかが悲しみの調べを加減するようおまえに
　意見したら、とくと嘆きながら言うのだ
　悲嘆をしかと感じる者には、嘆きこそ唯一の楽しみと。
昼間と名付けられる陽の光よ
　おまえはもはや耐えられぬことを巧みにやり過ごす
　喪の夜が漆黒の衣装を披露するのだから。
おお、フィーバス、尤もだ、おまえが顔を隠すのは
　おまえの凡てを見晴るかす眼がこの光景で汚れるなど
　以っての外、おまえが四輪馬車を操るときに。
この丸天井の空は逝去された御方を被う
　堂々たる墳墓に極めて似つかわしく見える。
　馨しき詩神方、いまは悲しみの調べを降り注ぎたまえ。

おお、ピロメーラ、恥辱と悲嘆に打ちひしがれし胸で
　助けて、わたしが慟哭するのを助けて欲しい
　決して癒されぬ呪われし危難を。
おまえの悲痛の旋律が全く絶えたのならば
　わたしの嘆きに静かに耳を傾けるのだ
　世の人々に愁訴を教えたい気分だから。
おまえ、この快活な大気を曖昧な色で
　汚さんと力を尽くすほの暗い雲よ
　おまえの苦悶の涙を日々の雨で証しせよ。
おお、太陽、人の眼で認められる形で
　おまえが姿を見せたことがあったなら
　徳が死んだ今、おまえの勝利をこの場所に置くのだ。
善を奪われ、今や善など一つとて存在しない
　この世に、おまえの勝利を置くのだ。
　さすればおまえの栄華と比べてわれらの喪失が想像されよう。
おお、わが曲調よ、しっかりと結び付くのだ
　あまりの悲嘆におまえは解体してしまいそう。
　馨しき詩神方、いまは悲しい調べを降り注ぎたまえ。

常に老い常に若い〈時〉はそれ自体の内部を
　いつもぐるぐる回り、決して終わりがない。
　だが人間は永遠に無へと還元される。
不浄の蛇は老いた皮を脱ぎ捨て

　再び若返り、若さを誇らしく飾る。
　だが人間には、老いは常に死を送り付ける。
接ぎ木して木々を慈しみ育て
　木の寿命を長く引き伸ばすことが出来る。
　だが木々を助ける人間は、助けられずに必滅する。
こうして、凡てに君臨する精神は
　年の功によって最高の思慮分別を得るが
　その時、死の忌むべき行為によって終末を迎えねばならぬ。
われらの寿命は短く、長く続く場所を築く。
　ああ、皆で卑劣な自然に刃向かって叫ぼう
　われらは自然の作品を助けるのに、自然はわれらを破壊すると。
自然はこの訴えにどう応えよう
　自然は自分の子供、最良の子供を殺すのだから。
　馨しき詩神方、いまは悲しみの調べを降り注ぎたまえ。

ああ、わが弱々しき声は、この正当な嘆きの
　激越な流れを遮断するのみと思われる。
　わが音声は、思うに、どんな場所も悲しみで満たさない。
私は私を知らず、きっぱりと私自らを、そして
　命に含まれる凡てを嫌っている
　なぜなら、死神が徳の砦に侵入したから。
苦悩の一つの言葉が別の言葉を引っ張り出す。
　私の創意がどんなに粗野であろうと構わない
　どんな悲しみが私の中で支配しているのか分かるならば。
おお、四大よ、人が言うには、お前たちの営為によって
　われらの肉体は生きる力を養われるが
　この御方の崩御はお前らの仲違いのせいなのか。
おお、医術の力よ、死神の接近をしりぞけると人は言うが
　哀しいかな、おまえの助太刀は乏しい
　一旦人がアトロポスのために差し押さえられるときには。
医者の自惚れは大きいが、援助は僅か。
　根の生えた湿りも功を奏さず、乾いてしまえば
　医者たちは諦め気分、死神の熱意が強すぎてと言い訳する。
アイスクラピオス[14]没後以来、人が誰かから

14　ギリシア・ローマ神話の医術の神、アスクレピオスとも言う。アポロンとニンフ、コロニスの

　　買うものは、それゆえ、慰めの言葉に過ぎない。
　　馨しき詩神方、いまは悲しみの調べを降り注ぎたまえ。

　正義は今や、ああ哀しや、圧し拉がれている。
　　気前よさは止めを刺された。
　　善は晴れ着の代わりに埃を纏う。
　羊飼たちはお前たちのこの上ない混乱を悲しむ。
　　お前たちに与えられたこの絵模様を見れば
　　死がわれらの古里、生は単なるまやかしに過ぎぬ。
　ああ、お前たちから消えたのは誰なのか、とくと見よ。
　　消えたと。いや、彼のためなら悦んで
　　死ねる者たちから永遠に追放されたのだ。
われらの視界から、瞬き一つせぬうちに、消えたのだ
　　羊飼の中の羊飼は。その御方が整えた秩序の御蔭で
　　国民は豊かさに富み、国は平和に祝福された。
　その御方がご存命中は、無秩序など遠い圏外。
　　指図よりは手本が普及し
　　内輪もめや、敵たちは国境の遥か彼方にあった。
　彼の生活が法律、彼の眼差しが完璧な矯正
　　彼の健康にわれらの健康が保たれ
　　彼の病気が確実にわれらに感染した。
　彼の死はわれらの死。だが、ああ、わが詩神は
　　そのような苦悩を知らせる深い嘆きから逸れてしまった。
　　嘆きこそ彼に捧げるに相応しいのに。
　重い心の文体は決して駆け登れない
　　そのような苦痛を広く知らしめるほど高くは。
　　だから、やめよ、詩神。おお、死神め、お前の矢を使うがよい。
　いざさらば、大公様、善により栄光高かりし御方様。

息子。アルテミスに射殺されたコロニスの胎内から救い出され、ケンタウロスのケイロンに預けられ、彼から医術を習得するが、彼が人間の死者を蘇生させる医術を実践したことを危惧して、主神ゼウスは彼を雷電で打ち殺害する。息子を殺されたアポロンは、復讐のため、ゼウスの雷電を作ったキュクロプスを殺したために、アドメトス王の城で一年間の労働をゼウスに強いられて、その罪を贖った。アイスクラピオスを祭る神祀はテッサリアで始まり、ギリシア全土に広まった。彼は、夢の中で病者を治すと信じられたので、彼を祭る神殿の中で眠る行為が普及した。彼はしばしば蛇が絡まった杖を持った姿で描かれ、死後は天に昇って蛇使い座になった。

解　説

ここにその一部を注解付で発表された数篇の詩歌は、シドニーの初期恋愛ロマンス『オールド・アーケイディア』に含まれるものである。この作品はどのような経緯を経て書かれたのか、また、その構造・内容について略述してみよう。

サー・フィリップ・シドニーは、1554年11月30日にケント州のペンズハースト邸で呱々の声を挙げた。名付け親は時のイングランド女王メアリ（在位1553～58）の夫で、後のスペイン王フェリペ二世（在位1556～98）で、彼の名を英語読みしたのである。彼の父ヘンリー・シドニー卿は、身分はジェントルマン階級であるが、極めて有能な政府官僚で、エリザベス女王政権下では女王の信頼を得て、1559年以降ウェールズ境界地域長官及びアイルランド総督代理として植民地政策に熱心に取り組んだ。母方は大貴族に連なり、祖父はノーサンバランド公爵（エドワード六世没後、カトリックであるメアリ一世の即位を阻止するため、息子とジェーン・グレイ王女を結婚させて、その摂政として政権を牛耳ろうとしたが失敗し、断頭台の露と消えた）、そして、実母の弟である二人の叔父は今を時めくレスター伯爵（エリザベス女王の若き日の恋人）とウォリック伯爵（宮廷の主馬（しゅめ）の頭（かみ））であった。二人の叔父たちは嫡子に恵まれず、甥のフィリップが彼らの後継ぎと目された。シドニー家･ダドリー家両家の期待の星として幼い頃から英才教育を施され、7歳になった時からイタリア語・ラテン語・フランス語を家庭教師に仕込まれ、10歳になると、イングランド西部のウェールズに隣接するシュロップシャの州都に新しく設立されたシュローズベリー校第三年次に入学した。同日、生涯の友となるフルク・グレヴィルも入学している。極めて有能な校長トマス・アシュトンは、ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・コレッジのフェローを兼ね、創設から僅か十年でほとんど無名だった学校を王国随一の寄宿制学校に育て上げていた。

校長初め優秀な教員たちの厳しい指導の下、シドニーはとりわけラテン語の読み書き能力に磨きをかけた後、1568年2月、13歳のシドニーは、叔父のレスター伯爵が総長を務めるオックスフォード大学、クライスト・チャーチ･コレッジに入学し、ラテン語のスペシャリストでプロテスタント神学者、後年、大学副総長を務めたトマス・ソーントンの個人指導を受けることになる。1571年春になると深刻な疫病が蔓延し、大学の一切の活動が阻害された時、16歳のシドニーは学位を取得しないままオックスフォードを後にした。翌72年5月、三人の従者と四頭の馬を従え、「諸外国語の知識に磨きを

かけるため」大陸巡行に出掛ける許可をエリザベス女王から与えられた。

叔父のレスター伯爵は、当時パリに大使として滞在中のサー･フランシス･ウォルシンガム宛の書簡で、シドニーのことを「若く未熟」であるゆえに、「彼の眼には、諸外国の人々の慣習・態度・振る舞いが物珍しく映る」であろうが、万事宜しく頼むと書いている。将来のシドニーの岳父となるウォルシンガムの許に 3 ヶ月ほど滞在した時、聖バーソロミューの日の大虐殺事件が勃発し、シドニーは命からがら大混乱のパリを脱出した。その後は、ハイデルブルクからフランクフルト、ストラスブルク経由でウィーンの神聖ローマ皇帝を伺候し、ハンガリーを通過して最終目的地のルネサンス文化・芸術・学問が咲き誇るイタリアに入り、ヴェネチア、パアドュアに滞在し、フィレンツェやジェノアを旅して、当時の最先端の学芸文化に触れ、それを貪欲に吸収した。そして、その地から逆の道を辿って、約 3 年後の 1575 年春にイングランドに帰国する。

高い教養と、諸国の要人たちとの面識を得た若きシドニーは前途洋洋、意気揚々とし、宮廷で権勢を揮っていた二人の叔父たちの後ろ盾もあり、高邁な理想と高い野心に燃えていたであろう。しかし、シドニーの華々しい政治的活動はただの一回きりで、神聖ローマ皇帝マクシミリアン二世崩御に対する女王の公式の使者として伺候する機会を与えられたのみであった。生来の誇り高い性格ゆえか、彼の自負心・自尊心ゆえか、あるいは、他の様々な要因があってのことか、シドニーはたとえ女王に対してでさえ歯に衣着せぬ物言いをすることがあった。フランス王弟アランソン公爵と女王の結婚話に関して、熱心なプロテスタント主義を奉じたダドリー家・シドニー家の者としてシドニーは、祖国全体のみならず、自らの一族の命運を左右する一大事と自覚して、女王に対して再考を促す公式書簡を送りつける。その結果、言を左右し、中庸を重んじる女王の逆鱗に触れ、宮廷出入り差し止めを食らってしまう。

閑暇を持てあましたシドニーは、実妹メアリの嫁ぎ先、ペンブルック伯爵の田舎屋敷ウィルトン邸に寄寓して、メアリや、彼女が主宰する「小宮廷」に集う貴婦人や文人たちに楽しんでもらうため恋愛ロマンスや詩歌・詩論を書き継ぐ。それらはやがて『オールド・アーケイディア』、『アストロフィルとステラ』、『詩の擁護』として、シドニーの叔父レスター伯が総大将を務めたオランダ戦役に出征し、スペイン軍との交戦中に敵が放った鉄砲の流れ弾で負傷し戦没した後に、友人たちや実妹メアリの尽力にて出版されることになる。

いわゆる『アーケイディア』という作品は、3 種類存在する。1580 年の夏頃に完成したとされる「初稿」は、実妹に対する作者の「献呈の辞」に依れば、

「手慰み」であるから「手慰みに扱われて当然の代物」と言うが、約180,000語から成る長編で、意匠・内容の極め細やかさ、五巻に及ぶ歌交じりの散文で書かれた地の文と四つの牧歌集との仕上げ方等から判断して、極めて入念に計画実行された優れた「牧歌的恋愛ロマンス」の完成版と評することが出来よう。しかし、この作品は、1907年にバートラム・ドベルが完全な形の写本で発見するまで、ずっと知られざるものであった。

この『オールド・アーケイディア』と呼ばれる「初稿」を1584年頃まで徹底的に加筆推敲し、散文の地の文の最初の三巻の終わり近くまで加筆推敲した原稿は、作者がオランダ戦線に出掛ける前に友人のフルク・グレヴィルに託された。シドニー没後の翌年、ロンドンで国葬級の葬儀が岳父ウォルシンガムが費用を捻出して執り行われた後、1590年に未完成のまま友人たちの手で出版されたのが、『ニュー・アーケイディア』と呼び習わされる作品である。これは、「初稿」に徹底的に手を入れ、これを2倍近くに膨らませたもので、未完でありながら、「初稿」全体と同じ位の分量がある。

シドニーの実妹ペンブルック伯爵夫人は、この未完作品の出版を不服とし、『ニュー』として書き上がった三巻の中途までの部分と、その後の三巻の後半、四、五巻の展開部分を『オールド』から継ぎ足し、修正を加えた上で、無理やり完成版として1593年に出版した。しかし、作者の意図を忠実に再現したとは言い難いこの折衷版がそれ以来ずっと読み継がれ、18世紀になって近代小説が盛んになる前は、英語で書かれた最も独創的な散文虚構作品として人気を博した。

『アーケイディア』には、新旧を問わず、巧みなプロットの展開、一連の強烈な状況描写、様々な人物類型の創造、一驚に値する大団円等が含まれる。物語は四六駢儷体の修辞文で高雅雄弁に綴られ、主要主題となる愛の情熱が、時には感傷的に、時には官能的に、時には知的な機知に富んで描かれている。それは単なる愛の物語を超えて、王権とその支配の座に就く者の義務・務めを扱い、公的出来事の本来的な差配の仕方、私的倫理の複雑で悩ましい諸問題に議論が及ぶ。

古来、理想郷とされて来たギリシアのペロポネソス半島の中央に位置するアルカディア国の大公バシリオスは、アポロンの謎めいた託宣（歌一番を参照）を下されて王としての義務を回避し、アルカディアの深い森の中に一家と特別に寵愛する羊飼たちと共に隠棲し、愚かなダメタスを忠義一身の正直なダメタスと取り違え、彼の一家（妻マイゾ、娘モプサ）に大切な二人の姫君を託してしまう。他方、マケドニア国のユアルカス王は、主人公の二人の王子たちの父であり、叔父でもあるが、正しい判断と正当な王の完璧な鑑である。二人の王子たち、ピュロクレスとムシドロスは、小アジア諸国での遍

歴の旅の後、故国へ帰国の途上で陰謀による船の難破に逢い、期せずしてアルカディア国に辿り着き、二人の王女たち、フィロクレアとパメラにそれぞれ恋をしてしまう。彼らは、個人的恋の要請と合理的理性的行動の要請とに挟まれて抗(あらが)い、情欲の結果を忌避し私的高潔を維持しようとする。

本作品は、基本的に、深刻沈着な恋物語であり、公的・私的人生における行為の諸問題に関わり、情感とユーモア溢れる、極めて質の高いロマンスに仕上がっている。シドニーが『詩の擁護』の中で提唱している「悦ばしき教え」をまさしく実践している作品である。

シドニーの芸術的理想は明晰な構造の中に最大限の複雑精妙多様な内容を実現することであったが、『オールド・アーケイディア』は、五巻又は五幕構成の悲喜劇であり、精妙なダブル･プロット（アルカディア大公バシリオス、公妃ギネキア、ピュロクレスの実父でムシドロスの叔父、マケドニア王ユアルカスに関わる二組の高貴な恋人たちのメイン・プロットと、羊番頭ダメタス、その妻マイゾ、その娘モプサに関わる喜劇的なサブ・プロット）を備えている。主要な筋は比較的少人数の人物たち（実質的には 18 人しか登場しない）で展開され、場所と時とが統一されている。ほとんどの出来事がアルカディア国の奥深い森の中にある二つの隠棲別荘付近で起きるし（二人の王子たちの小アジアの諸王国での数々の冒険の旅は、語りの言葉で複数の人物から報告されるのみだ）、プロットは一年以内に繰り広げられる。古代ローマの喜劇作家テレンティウス的五幕構造は、導入部、展開部、大団円で出来ているが、『オールド・アーケイディア』の筋を織りなす多種多様な織糸は複雑に絡み合い、三巻（三幕）にクライマックスが来て、四巻（四幕）にそれへの対抗運動が襲い、五巻（五幕）に大詰めが用意され、全く予期せざる認知(アナグノリシス)と運命(ペリペティア)の急変が起きる。この意味で、シドニーは散文作品ではあるが、牧歌的悲喜劇の先例を創造したと言って過言ではない。

散文の語りに劇的構造を与えたことに加えて、シドニーは技巧を凝らし、各巻（幕）の間に区切りを入れ、一巻（一幕）の次に息抜きの手段として「第一牧歌」を挿入し、その後順次に、第二巻（第二幕）→第二牧歌→第三巻（第三幕）→第三牧歌→第四巻（第四幕）→第四牧歌→第五巻（第五幕）と構造化した。牧歌集は幕間演芸、間奏曲、あるいは主旋律にアクセントを与える装飾音符みたいな役割を果たす。牧歌集に現れる人物たちは、各巻（各幕）に登場する人物たちとは別個の配役陣が多いし、彼らの役割は主プロットを推進することではないが、それでも、主筋の物語の音調を設定し、語りの方向を統御して主題を定位するのに一役果たす。牧歌世界という現実離れした異世界で、宮廷世界の貴人たちの行為振舞が羊飼たちの鄙びた歌の中に投影され、これを窺うための遠近法的視点が与えられるのだ。

牧歌集は、主プロットの意匠に貢献するが、それ独自の構造を持つ独立した単一体であり、完璧に自立できる存在である。しかし牧歌集は物語全体の不可欠な構成要素として『アーケイディア』の散文体の地の文の内容に密接に関わっているので、それ自体のみで考察されてこなかったし、シドニーも牧歌詩人として自らの本分を受容しなかったであろう。イギリス・ルネサンス期の牧歌詩集としてまず指を屈せられるのは、シドニーの盟友、エドモンド・スペンサー（1552 ～ 99）のシドニーに献呈された処女作『羊飼の暦歌』であり、『アーケイディア』の牧歌集に含まれる個々の詩にはさほど焦点を当てて論究されてこなかったが、しかし、全部で 2,500 行を超える長短 27 篇の詩から成る四つの牧歌集は、スペンサーの牧歌集の規模と多様性に勝り、芸術的価値において同等の注目を浴びるに値するのではないかと思われる。

シドニーの牧歌集の最大の特徴の一つは、緻密に統一された構造である。四つの牧歌集の各々が一つの状況を展開し、一つの主題を探求する。第一牧歌集は報われない恋の苦悶を提示し、第二牧歌集は〈理性〉と〈情熱〉の葛藤を、第三牧歌集は結婚愛の理想を、第四牧歌集は恋する者たちの悲嘆と死の悲哀を歌い、これらの牧歌すべての中をシドニーの分身である羊飼フィリシデスの姿が揺曳する。彼の身元・正体と独自の経歴が読者に提示されるのは、最後の最後においてである。

第一・第二牧歌集には、各々八篇の歌が含まれ、正確に対応する順序で並べられている。各々の第一の歌は、その後に続く歌篇が関わる主題を提示する。つまり、第二の歌はその主題を継承発展させ、第三の歌はその主題を皮肉る喜劇的間奏曲で、第四の歌はその主題に戻り、第五の歌はフィリシデスと彼の愛を扱い、最後の三歌は羊飼に変装したムシドロス王子とアマゾン女戦士に女装したピュロクレス王子に歌われて、主題の実地的応用を例示する。

第三牧歌集には、羊飼ラロスとカラの結婚祝歌五篇が含まれ、前二者とは異なる構造形式が見られる。まず新婚の二人への祝賀を言祝ぐ形式的な祝婚歌があり、根拠のない嫉妬の禍根を例証する滑稽な小話、夫の手本を描くソネットが続き、君主制の起源に関する動物寓話がフィリシデスによって語られ、結婚の勧めと、結婚生活の二重の軛（くびき）を互いの同意で分かち合うことの正当性を歌って、第五歌が終わる。

バシリオス大公の崩御（実は、妻ギネキアとの同褥の後、体力回復のため妻に勧められた一種の活性剤を飲んで仮死状態になっているのだ）と、パメラ姫との駆け落ちの途中、夜の森の中で山族たちに囚われて連れ戻されたムシドロス王子と、フィロクレア姫と一夜を明かした後、ダメタスに現場を押さえられたピュロクレス王子との投獄に関する語りの後に現れる第四牧歌集は、恋する者の苦悩の歌と死者への哀歌としてルネサンス期のエレジーの二

重の性格を開拓する六篇の対になる歌で構成される。初めの二歌で、羊飼ストレフォンとクライオスは愛するユレイニアの不在を嘆く。二番目の二歌では、フィリシデスが愛するミラに夢の中で出会った次第と、彼女に拒絶され別れを惜しんだ次第が歌われ、最後の二歌では、ディコスとアゲラストスがバシリオス大公の崩御を形式的牧歌エレジーと脚韻を踏むセスティナ（六行六連体）で痛嘆する。

四つの牧歌集は各々単一の主題を扱うが、個々の詩は形式において、韻律において多種多様で、その多彩さは、スペンサーの牧歌集を凌ぐ。牧歌の慣例的趣向――歌比べ、対話詩、愛の嘆き、葬送エレジー等もあれば、古典的牧歌には見られない趣向――動物寓話、結婚祝歌、滑稽話、紋章図案等もある。韻律も目覚ましいほど変化に富み、弱強四歩格、弱強五歩格、弱強六歩格の対句、テルツァ・リーマ（三韻句法）、六行連スタンザ、ライム・ロイヤル、リフレインを伴う様々な行の長さから成る九行連、一四行詩、エコー詩、連環詩等が存在する。個々の歌い手は、その性格にふさわしいリズムを付与され、土着のアルカディア人はイギリスの読者には普通の音の強弱をリズムとして歌い、高貴な異国人は技巧的な音量詩のリズムを利用して歌う。

四つの牧歌集に含まれる歌に加えて、『オールド・アーケイディア』の散文で書かれた地の文の語りには、51 篇の歌が挿入されている。宮廷人から最も身分の低い羊飼に至るまで、大半の登場人物たちが様々な場面で歌を捻り出す。本作品が歌物語と評される所以だ。これらの歌もまた形式、種類、情緒などにおいて極めて多様である。シドニーは詩作において様々な実験を重ね、詩に関する自らの考え方を実践し、『アーケイディア』を瞠目すべき多彩な歌物語に仕上げているのである。